第十四講　物語・小説の読解⑤

Step 1

一　次の文章を読んで、1～6の問いに答えなさい。

天保五（一八三四）年五月五日。朝から空は青く晴れ上がり、五ツ（午前八時）を過ぎると二三（ふみ）が遊ぶ庭にも陽光が①トドいていた。

「くろ、そっちに行ったら駄目だって」

庭を駆け回る犬を、二三が呼び止めた。走っていた犬が立ち止まり、二三に振り返った。

くろは二三の誕生に先駆けて、父親の亮助（りょうすけ）が浜の漁師からもらった犬だ。

「犬は安産のお守りだからよう」

二三誕生の数日前にもらってきた子犬は、二三の誕生までは名なしだった。が、鼻が真っ黒で黒目の大きい子犬を見た亮太（りょうた）とみさきは、勝手にくろと呼んでいた。

丈夫な二三が誕生したあと、子犬はくろと命名された。

二三と同い年の四歳だが、くろはもはや成犬である。それでも犬なりに、二三とは②カクベツの間柄であることをわきまえているらしい。まだこどもの二三には、ことのほか従順だった。

「柏（かしわ）の葉っぱを踏んだら、おかあちゃんに叱られるでしょ」

大きな犬が、子犬のようにクウンと鼻声で鳴いた。

「ほんとうに分かったのかなあ」

二三は首をかしげながら、くろのあたまを撫（な）でた。

今日は端午の節句である。亮太はもう十二歳で、しっかりと菜種作りの家業を手伝っていた。

「亮太はほんまによう働くのう。亮助さんが、うらやましいがね」

村の農家の女房は、亮太の働きぶりをうらやましがった。周りからは一人前だとみなされている亮太だが、端午の節句の柏餅(もち)を、だれよりも楽しみにしていた。

柏は、新しい葉が出ると、古い葉を落とす。そのさまは、あたかも跡継ぎができたのを見定めて、③家督を譲るかのようである。

端午の節句に柏餅を食べるのは、この柏の葉のありさまに、代々の一家繁栄祈願を重ね合わせて祝うのが、興(おこ)りのひとつとされた。

とはいえ、亮太が柏餅をだれよりも喜ぶのは、甘い物好きだからである。が、たとえそうであっても跡取りがすこやかに育っているのは、亮助とよしにはこのうえない喜びだった。

それゆえよしは、毎年一家五人では食べきれないほどの柏餅を拵(こしら)えた。庭に干してあるのは、これから餅をくるむ柏の葉である。

この朝早く、よしは庭にむしろを敷き、百枚の葉を並べた。家族と一緒に、くろも甘い餅にありつくことができた。干された葉が、柏餅に使われることも知っているのだろう。

二三に何度叱(しか)られても、くろは葉が気になって仕方がないようだ。

母親のよしは、台所であずきの餡(あん)を拵えている。七歳のみさきが、台所の隅で糝粉(しんこ)を練っていた。粳米(うるちまい)を水に浸(つ)けて柔らかくしたあと、風で乾かしてから粉にしたものが糝粉である。これをよく練ったものを、柏餅の④生地に使うのだ。

亮太の好物を拵えるのは、よしとみさきの仕事だった。あずきの餡が、出来上がりつつある。甘い香りが、庭にまで漂っていた。

二三とくろが、一緒に鼻をひくひくさせた。

「お昼過ぎには、柏餅ができるんだって。お前も楽しみでしょう?」

ワン、ワンと続けて吠(ほ)えて、くろが尻尾(しっぽ)を振った。二三は、わざと顔をしかめた。

「おかあちゃんが蒸(ふ)かしてくれるのは、おにいちゃんとおとうちゃんが、畑から帰ってきてからだよ。ちょっと畑を見に行ってみようか」

立ち上がった二三が、先に駆け出した。くろがあとを追い始めた。

小さな坂道を登った先には、一面の菜の花畑が広がっている。五月五日のいまは、花はすっかり落ちていた。花を落としたあとには、

菜種が実を結んでいる。

（山本一力「菜種晴れ」より）

1　①トドいて　②カクベツを漢字に直して書きなさい。また、③家督　④生地の読み仮名を書きなさい。

（漢字）①［　　］いて　②［　　］

（読み）③［　　］　④［　　］

2　「柏餅」にまつわる話のように、日本人が幸せを願い、動植物の特性にあやかって暮らしの中に取り入れてきたならわしが、本文中にもう一つ書かれている。解答欄にしたがって当てはまる語句を、本文中から抜き書きしなさい。

［　　］を［　　］とすること

3　走っていた〜振り返ったと時間的に連続している文を本文中から見つけ、**始めの五字**を抜き書きしなさい。

［　］［　］［　］［　］［　］

4　よしは〜拵えたとある「よし」の心情を次のようにまとめるとき、〔　A　〕〔　B　〕に当てはまる内容を、それぞれ**十五字以内**で書きなさい。

好物を〔　A　〕という愛情と、長男を〔　B　〕という願い

A

B

5　次に示すのは、ある生徒が、二三の家族のこの日の様子を、ノートに整理したものである。内容が正しくなるように、〔　a　〕〔　b　〕にはそれぞれ適する語句を書き、〔　c　〕には推測される内容を**十字以内**で書きなさい。

〈端午の節句〉

朝から昼にかけて	午後
二三本人・犬のくろ…庭で遊んだ後、畑へ 父親の亮助・兄の亮太…〔　a　〕に励む 〔　b　〕…台所で柏餅を作る	家族そろって、 〔　c　〕

a

b

c

6　菜種が実を結んでいるという描写が連想させる家族の姿を、解答欄にしたがって**十五字以内**で書きなさい。

家族の姿

【秋田県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、1から6までの問いに答えなさい。

> ある日、私（「先生」と呼ばれている）は、釣りをしていた「長」や「かんぷり」というあだ名の少年たちに出会い、鮒を売ってもらう。それから三日して、少年たちが、私の家を訪ねてきた。

「鮒とってきただよ。」と長が言った、「買ってくれせえな、先生。」

私はかれらの期待に満ちた注目をあびて、自分に拒絶する勇気のないことを悟り、かれらを勝手口へ廻らせた。そこでも(1)かれらは一列に並び、ひとりひとりが私に向かって自分の鮒に値を付けさせた。そのときになって初めて、寝起きのぼんやりした私の頭が、かれらの(注1)奸悪な計略を理解した。つまり、まとめて売れば安くなるが、一尾ずつなら安い値踏みはできない、という狙いなのだ。

「ほれ、みせえま。」とかれらはそれぞれの鮒を私に誇示した、「こんなにえっけえだ、五寸くれえあるだえ、先生。」

そして「(注2)しょっから」へゆけばこれ一尾で一(注3)かんは取られる、と言って互いに頷き、肯定しあうのであった。私はそこでもまた自分が罠に落ち、縛りあげられたことを知った。私はかれらの誘導にしたがって、値段を付け、それらを買い取った。

「(2)いいさ。」と私はかれらの去ったあとで自分に言い聞かせた、「味噌煮にしておけば保つからな、当分おかずに困らないで済むわけだ。」

私はまえの味噌煮を丼へ移して、それらの鮒を新しく味噌煮にしかけた。

人は信用しないかもしれない。私自身もこれを書きながら、たぶん人は事実だとは信じないのだろうと思うのであるが、少年たちはその儲け仕事があまりにたやすく、かつ確実であることに昂奮と情熱を感じたらしい。(3)二三日するとまたやって来て、さもうれしそうにはしゃぎながら、窓の戸を叩いた。

「並べってばな。」と長の言うのが聞こえた、「おんだらが先だぞ、押すな。」

拒絶されようなどとは寸毫(注4)（すんごう）も疑わず、確信そのもののような少年たちの顔を見て、それだけで私は自分の敗北を認めた。——ここまで読まれた方は、もはや小悪魔どもが私を放さないだろう、と想像されるにちがいない。私にしても、仮にふところがもっとあたたかであったら、容易にかれらの手から逃れがたかったろうと思う。人は黄白(注5)（こうはく）の前には、しばしば恥を忍んで屈しなければならないものだ。少年たちが四度めに襲撃をかけて来たとき、ふところの窮乏という現実に助けられて、私はきっぱりと鮒の買い取りを拒絶した。するとそこに、(4)<u>まったく予想しない事が起こって</u>、私をおどろかせた。

私に拒絶されて、少年たちは明らかに失望し、途方にくれた。かれらは顔を見交わし、先生が駆引（かけひき）しているのではないかと疑い、そうでないことを認めるともっと失望し、どうしたものかというふうに、それぞれの手にした器物の中の鮒を見まもった。

「みんな。」と長が急に言った、「それじゃあこれ先生にくんか。」

くんかとは、贈呈しようか、というほどの意味である。途方にくれ、落胆していた少年たちの顔に突然、生気がよみがえった。それは囚（とら）われの縄を解かれたような、妄執がおちたような、その他もろもろの羈絆(注6)（きはん）を脱したような、すがすがしく濁りのない顔に返った。

「うん、くんべ。」と少年の一人が言った、「なせ、これ先生にくんべや。」「くんべ、くんべ。」「先生、これ先生にくんよ。」とかんぷりが言った、「みんな、勝手へいってあけんべや。」

私は自分の大きな過誤を恥じた。

少年たちに狡猾(注7)（こうかつ）と貪欲（どんよく）な気持ちを起こさせたのは私の責任である。初めに私は「その鮒をくれ。」と言えばよかったのだ。売ってくれと言ったために、かれらは狡猾と貪欲にとりつかれた。私のさみしいふところを搾取（さくしゅ）しながら、かれらも幸福ではなかった。その期間、かれらは貪婪(注8)（どんらん）な漁夫でありわる賢い商人だったからだ。私は深く自分を恥じた。

「先生にくんよ、か。」と私は口まねをしてみた、「これ先生にくんよ。」

そう言ったときの、すがすがしく、よみがえったような顔つきや動作を思いうかべながら、(5)<u>私は深く自分を恥じた</u>。

（山本周五郎「青べか物語」より）

（注1）奸悪な計略＝悪だくみ。
（注2）しょっから＝つくだ煮屋の店の名前。
（注3）かん＝銭貨を数える単位。
（注4）寸毫＝ほんの少し。
（注5）黄白＝金銭。黄金と白銀による。
（注6）羈絆＝行動を束縛するもの。
（注7）狡猾＝悪がしこくて、ずるいこと。
（注8）貪婪な＝欲の深い。

Step 2

1 (1) かれらは一列に並び、……鮒に値を付けさせたとあるが、その理由を「私」はどのように考えているか。

ア　私がぼんやりとしているうちに、鮒を高値で買わせるため。
イ　鮒をまとめ買いされて、値が安くなることを避けるため。
ウ　礼儀正しくすることで、鮒を気分よく買ってもらうため。
エ　一尾ずつ交渉することで、鮒をすべて買い取らせるため。

□

Step 2

2 (2) いいさと言ったときの「私」の心情を説明したものとして最も適切なものはどれか。

ア 仕方がないとあきらめ、自分を納得させようとしている。

イ 落ち着きを取り戻し、思わぬ成果を手にして喜んでいる。

ウ 悔しくてたまらず、怒りのやり場を失ってしまっている。

エ 本音を出すことができずに、ふてくされてしまっている。

Step 2

3 (3) 二三日すると……窓の戸を叩(たた)いたにあるような態度の「少年たち」をたとえた表現を本文中から五字で抜き出しなさい。

Step 3

4 (4) まったく予想しない事とは、どのようなことか。二十字以内で書きなさい。

Step 3

5
(5) 私は深く自分を恥じたとあるが、なぜか。五十字以内で書きなさい。

Step 3

6 本文の特徴を説明したものとして、最も適切なものはどれか。

ア 本文中に方言を多用することで、地元の人々との触れ合いの中で成長する少年たちの姿を読者が想像しやすくなっている。
イ 慣用句や難解な熟語が繰り返し用いられることで、厳格で近寄りがたい主人公の人柄を読者が理解しやすくなっている。
ウ 本文中に読者の反応を想定した表現が入ることで、読者が物語を現実にあった出来事としてより感じやすくなっている。
エ 郷愁を誘う風景描写に、登場人物の心情を重ね合わせることで、読者が少年たちの心情の変化に気付きやすくなっている。

【栃木県】

第十四講　物語・小説の読解⑤

Step 1

一

解答

1、(漢字)①届(いて)②格別(読み)③かとく④きじ　2、犬(を)安産のお守り(とすること)　3、「柏の葉っ(または、柏の葉っぱ)　4、A、たくさん食べさせてやりたい(13字)B、立派な跡取りに育てていきたい(14字)(それぞれ同意可)

5、a、畑で仕事　b、母親のよし・姉のみさき　c、〔家で〕柏餅を食べる(それぞれ同意可)　6、仕事に精を出し、仲良く暮らす(家族の姿)(14字)(同意可)

解説

2、父親の亮助がくろをもらってきた理由に着目する。

3、くろがもらわれてきたときのことが書かれた後、一三が「そっちに行ったら駄目」な理由をくろに話す場面になっている。

4、直前の「それゆえ」は、「亮太が柏餅を…甘い物好きだからである」ということと「跡取りがすこやかに…このうえない喜びだった」ということを指している。この二点と関連させて考える。

5、a、「おかあちゃんが…見に行ってみようか」という一三の言葉に着目する。b、「亮太の好物を…仕事だった」とある。c、一三が「お昼過ぎには…できるんだって」「おかあちゃんが…帰ってきてからだよ」と話していることから考える。

6、「実を結ぶ」から、順調に進む様子を読み取り、この文章全体で描かれた家族の様子と合わせてまとめる。

Step 2・3

二

解答

1、イ　2、ア　3、小悪魔ども　4、少年たちが私に鮒をくれると言ったこと。(19字)(同意可)　5、鮒を売ってくれという私の一言が、本来純粋な少年たちを狡猾で貪欲な気持ちにさせていたのだと思ったから。(50字)(同意可)　6、ウ

解説

1、ようやく私が「かれらの奸悪な計略を理解した」とある。かれらの「計略」「狙い」をおさえる。
2、「自分に言い聞かせ」て、「味噌煮にしておけば…済むわけだ」と考え納得しようとしている。
3、「かれらの奸悪な計略」という表現や、「私はそこでもまた自分が罠に落ち…買い取った」という状況をふまえて、「私」につきまとう少年たちを表現するたとえをさがす。
4、失望した少年たちが「どうしたものかと…鮒を見まもった」ととまどいを見せた後にとった行動をおさえる。
5、少年たちの態度の変化によって、「私は自分の大きな過誤を恥じた」とある。「大きな過誤」「私の責任」の内容をおさえる。
6、「ここまで読まれた方は…想像されるにちがいない」という表現によって、読者に直接語りかけている。地元の人々と少年たちの触れ合いは描かれていないので、アは不適。主人公の人柄が厳格で近寄りがたいとは読み取れないので、イは不適。風景描写はほとんど見られないので、エは不適。